

詩集 いま会いにゆきます
(過ぎし日の想い)



飛鳥 圭

prologue

亡くなった最愛の人が久しぶりに帰ってくるとしたら、あなたは どうしますか？
何処へ帰ってくるのだろうか！ 遙か遠い未来からこの世に帰ってくるって想像
もつかない。

けれど最後の言葉をかけていないから、今もずーと気にしてて心に重い記憶
だけが残っていたのである。..だからなのか新たな恋が育たないと思いつんで
しまっていた。

そんな理由から会えるなら今からでも会いたいと思うのである。

ほんとうに困った妻である。

そんな想いを心に感じながら、数々の詩を書いていたのだから、著者自身は
もちろん読者の方々も果たしてどんな詩なのか気にかかるのではないかと
勝手に考えているのである。

そしてこの詩集で、初めてその想いを感じたいと思うのである。

果たして想いは叶うのか？

はたまた詩集のタイトルに添うような出来映えなのか気にかかるのである。

mokuji

prologue

/ :

- * 初秋の風
- * いざ秋のなかへ
- * 9月の君は
- * 今日の君
- * 好きだった
- * なつかしきかな
- * 集中
- * 見えないところ
- * こんなことも
- * 月夜

.....

- * さざんか
- * あなたの彼方
- * 気分をかえて
- * 劣等感
- * 良いことばかり
- * 紅葉の葉
- * 花のかんざし
- * 小春日和に
- * 新しいこと
- * まぼろし模様

// :

- * いつもの夢
- * いつまでも大好き
- * 挑戦者
- * 寒い空
- * 愛しき頃
- * 12月は
- * 美しいもの
- * 雑踏

- * プロポーズ
- * 赤いマント
-
- * 静かなクリスマス
- * 桃の花
- * 詩作
- * 空・そら
- * ふるさとの香り
- * 歌ありて
- * 神戸ポートタワー
- * 年のはじめ
- * 寒いから
- * 気になること

/// :

- * 会いたい人
- * 安らぎの中に
- * 妄想のひとつき
- * つぼみ達はいま
- * うそ
- * よろこび
- * 春のプロローグ
- * 大好きな人
- * あの頃は
- * approach
-
- * 小さい春
- * 星占い
- * 贈りもの
- * 季節とともに
- * 虚しきこと
- * 実家なり
- * 3月の車窓
- * ポジティブ思考
- * 3月の雨
- * 時をこえて

IV :

- * 水車の音
- * 年度末に考える
- * 人混みに消えて
- * 進路
- * 観梅
- * ゆとりの時間
- * 工事の音
- * 光と土と水と
- * 今を考える
- * 気分良く

.....

- * 陽が昇る
- * 今も夢見し
- * ネクタイ
- * 旅心
- * 前に進め
- * 恋人がほしい
- * 変な女の子
- * いつか来た道
- * 二度の恋
- * 緑の風の頃

V :

- * 梅雨の香り
- * 変なの
- * 食いしん坊
- * 顔と心と
- * 右向け右
- * 美しい朝
- * 好きな言葉
- * 子等の歓声
- * ワクワクドキドキ
- * 小さな幸せ

.....

- * 6月の恋
 - * よっちゃん
 - * 忘れない言葉
 - * 心の旅
 - * 結婚って
 - * ふるさとの夕日
 - * 海を越えて
 - * 空へ
 - * 夏は君と二人で
 - * ひまわり畑にて
- e p i l o g u e

初秋の風

— 初秋の風 —

秋の風が舞い
夏の残る風が
混じり合って

なぜだか
僕の心の中を
吹き抜けます

過ぎし夏の
君への想いと

秋らしくなった
季節に似合う
君の愛しき姿

僕は
初秋の風が
大好きなのです

いざ秋のなかへ

ーいざ秋のなかへー

いざ・・・？

いざ・・・x△！

秋のなかへ

いったい何があるのか

たかが秋なのに

でも秋って

良いよね

暑い夏からの逃避

芸術か食欲か

読書か旅行か

僕は・・・

大好きな人と

一緒に

恋するのがいい

相手があるって

一番良いこと

そして

会話が楽しいんだ

9月の君は

— 9月の君は—

初秋に会う君は
ひと皮むけたよう

そうよ痩せたのよ
くびれも
もっと出来ちゃった

そう言って
ふりむく君は
顔も細くって小顔に

いつもに増して
美人顔になっている

抱きしめると
壊れてしまいそう

嗚呼・・・
愛しきかな
大好きな乙女よ

僕は心の中で
叫んでいたのだ

そして
楽しい出来事は
夢の中に
消えてしまった

今日の君

—今日の君—

今日の君・・・
昨日の午後より
綺麗になった

何故って聞かないの
いいわその気なら

拗ねた横顔は
ドキッとするほど
きれいだった

何故だか
漢字の綺麗だと
余計に綺麗に見える

前にむいて
じっと見つめられた

何時もと同じ顔だよ
横顔がきれいな人って
いいよなあ
前から見ても
綺麗だし

ドキドキするって
こんな時なんだ

次に会うときは
横から・・・
抱きしめてみようっと

好きだった

—好きだった—

幸福という駅で
どちらともなく
声をかけた

初めて会ったのに
昔からの
知り合いのようで

街外れで
手を握った

君の温もりが
僕の心に届いた
君が微笑んだ
そして
瞳をとじた

君を抱きしめた
君の手が
僕の背に・・・
そこで夢が終わった

好きだったは
過去なのに
今も未来も
君が好きなんだ

なつかしきかな

—なつかしきかな—

遠くにおいて
想うふるさと

僕は近くにおいても
想っている

知らないところが
まだまだあって

まだ見ぬ島々は
夢の世界・・・
いやほんとうの
ふるさとも
知れない・・・

海を隔てた
ところって
心躍る未知の世界

昔の大航海時代の
ような気持ちが
しているのです

せっかちで
殺伐的な感じの
現在の世の
船旅は癒し的で
心にとまる
出来事だと思う

集中

—集中—

無心状態・・・
ひとりの人に片思い

熱中って
夢中になるって
良いことなんだ

真っ直ぐしか
見ないんだから
効率的じゃない

無心＝集中＝熱中
似たもの同士か！

いやいや
何も考えない
心をひとつに
そのことだけを

僕も
何事にも
集中しなきゃ

見えないところ

—見えないところ—

見えないところ

正面からでは

後ろの方かな

そして

どうしても

見えないところって

そうだなあ

心の中かなあ

それと

遠く離れてると

よく見えないよね

近くにいて

初めてよく見える

見えるために

みんなは

どうしているんだろう

もしも眼が

見えなくなったら

どうするのだろうか

言葉がその代わりに

してくれるのだろうか

言葉から感情を

そして心の中を

知るのかも知れない

見えないときは

言葉が大切に

口は心の中のことを
伝えてくれるのですね

こんなことも

—こんなことも—

やはり青春時代・・・
好きになった娘と
会ったりしようもなら
何故か
恥ずかしくって

何が
好きですかって
とりとめの
ないことを
聞いてみたり

話しても
いいですかって
言ったものの

言葉に詰まって
おどおどしたり

好きだった
歌を唄ったり
アルバムを
開いてみたり

二人きりっで
初めて
手を握りあった
そして
抱きしめた

月夜

一月夜一

夜なのに
満月って
明るすぎて

二人で歩くには
誰かに・・・
見られてるようで
はずかしい気がする

でも気持ちは
手を握りあって
夜道を歩くって
何故だか新鮮で
心までウキウキする

やっぱり
大好きな女性と
歩くっていいものだ

特に夜は
静かで
秋の季節を
感じてしまう

さざんか

—さざんか—

さざんかの咲いてる
僕の庭に・・・
名も知らない小鳥が
多くやってきて
さえずっている

遠いところから
鳴き声を聞いてると

このさざんかって
賑やかに咲いてるよ
花びらも可愛くって
良いよなあ
みんな休んでいこうよ

そんな風に
聞こえるのは僕だけか

近寄ってみると
小鳥たちは
行儀良く一列に
並んでいる

そして僕に気付いて
また来るからねって
飛び立っていくのです

あなたの彼方

—あなたの彼方—

あなたと歩いた
季節のいろいろな道

あなたと楽しんだ
いろいろな出来事
あなたを
愛して心もひとつに

僕は今・・・
あなたの彼方にいます
今はもういない君なのに

そこには・・・
君がいて僕がいる
そして幸せな時が

気分をかえて

劣等感

—劣等感—

幼児や少年の頃の
コンプレックス
未だに努力しても
矯正できないのだ

劣等感って
人間らしくって
いいものなんだけど
やはり気にかかっている

誰にでもあって
自分では許せないもの

他人が見れば
キャラがあって
魅力的なものなのに
そして人間性のある
臭いがするのだ

劣等感は長所の始まり
弱いところを
特定してしまうから
劣等感になるんだ
こんな時は
無視すりゃいい

良いことばかり

ー良いことばかりー

初めに冬ありて
寒い季節から
スタートするって
春が来れば
良いことだらけとか

正月って冬だよな
正月早々に早くも
良いことだらけだから

春はどれだけ
良いことがあるのかな

夏にはもっともっと
弾けちゃって
さらに良いことが
ありそうなんです

これだと年中
良いことだらけ
こんな1年って
ある訳ないよね

紅葉の葉

—紅葉の葉—

朝から
やわらかい風が
吹きました

きびしい冬の
訪れの前に
一葉の落ち葉

紅色の紅葉は
何故かはかない
恋の匂いがして

葉にすると
昔の出来事が
よみがえってくる

僕は愛読の詩集に
紅葉を葉として
使ってみようと
思うのです

花のかんざし

－花のかんざし－

古い町の路地裏
9月8日の誕生日を
過ぎた可愛い女性

会った途端に
何故か花の香りが
したのです

秋の花って
いい香りが
するんだね

何の花なのだろ
夢の中で
一度経験したような
そんな気がしてる

抱きしめると
僕のからだに
いっぱい
匂いが包みます

また・・・
会ってもらえますか

それじゃ1ヶ月後に
そんな別れ方を
したのです

僕のからだからは
今も花の香りが
しているのです

そして・・・
まだ花の名前を
知らないのです

小春日和に

—小春日和に—

冷たいきびしい
冬はそこまで来てる

なのに今日は
ポカポカ陽気

こんな時って
良いことばかり
あるのです

太陽の光を
一杯浴びるって
この時期には
少し贅沢なこと

心の中にまで
陽射しがさして
大好きな君が
現れるのです

ご機嫌よう
えっ・・・
たしか天国に
いてるはずなのに
どうして此処に

実は女房なのだ
今日は暖かいから
あなたに会いに来たのよ
まあそれはそうと
今からどこへ行く

二人は手を握り

腕をふりふりして
歩いていくのです

お墓参りをするって
考えられない
何か良いことが
あるのですね

新しいこと

—新しいこと—

冬だから
魚がうまい
人はやさしい

いつの季節も
なのですけどね

人恋しい
冬のこの季節

女子学生に
恋をしたのか？
会えなくて
寂しかったんだ

引っ越したのかって
あきらめていたら
再会できたのです

一緒のエレベーターに
何階ですかって
行き先ボタンを
押してくれるのです

僕も少年の頃の
昔の恋心に
憧れてる

そしてそして
ドキドキの心の
新しいことに
感激してるのです

まぼろし模様

—まぼろし模様—

誰かいるのか
いるなら出てきなさい

今度は低い声で
ほんとうに
誰かいるかい

すると
霧の中から
静かにしてって
声がするのです

今いいところなんだから
耳をすませてみると
歌声が何処からか
聞こえてくるのです

目を凝らして
じっと見てみると
妖精たちが
コンサートをしてる

いつぞやに
聞いたことのある歌だ
思い出そうとしても
思い出せないのであるが

そのうちに
歌も聞こえなくなって
妖精もいなくなった

誰かいるなら出てきなさい
読んでも返事がないのです

そして不思議なことに
辺りがまぼろし模様
になって来て

今度は
僕の心の中から
妖精たちが
歌っていた歌声が
聞こえてくるのです

いつもの夢

—いつもの夢—

夢っていつも同じ
そう思っていた

それは・・・
うなされる夢が
だいたい同じなのだ

今日は危険な夢
僕の白書的な
実情に良く似た
変な夢になった

美女に何故か
誘われて
とんだことに
巻き込まれるのだ

この夢を見ると
僕も映画のシーンの
ように颯爽となるのだが
怖いシーンが多すぎる

今度は
もっと良い夢を
見たいと
思っているのです

いまでも大好き

—いまでも大好き—

瞳を向けてほしい
そんなに可愛い
女性なんだから

君の横顔が
何故かさびしく
見えたのは
気のせいなのか

今思えば
そのときが別れの
心のシグナルだったのか

冬の別れって
とてつもなく
さびしいものだ

でも・・・でもって
いつか何処かで
また会える日を
願っている
僕がいるのです

挑戦者

－挑戦者－

何かに挑む
可能性を信じて
自分のために
皆のために

働かって
自分のためであり
人のためなんだ
いや・・・
社会のためなんだ

喜んでくれる
人がいるかぎり
自分が好きな資格に
挑戦するって
今日があり
明日がある

僕もわたしも
いつも挑戦者で
あり続けたい

寒い空

—寒い空—

木枯らしの吹く中で
いっぱい着込んで
木に登り・・・
枝を切ることに

躊躇していた作業
鋸の音が耳に響き
切った木の粉が
目の前で舞うのだ
つい眼を閉じてしまう

鋸を引く手に
力を入れないと
前になかなか進まない

やっと切り終わった瞬間
枝が折れて・・・
メキメキと音をたてて
地面に落ちていく

やった・・・
空を見上げると
寒い空である
夢中でやってると
何故か寒さは感じない

呼吸の音がするとき
いつもとは違った
息苦しさはあるのだが
達成した喜びが
こみ上げてくる
冬の始まりの
昼下がりの出来事だ

愛しき頃

— 愛しき頃 —

思い出の場所に来ると
決まってあの頃を
思い出してしまう

愛しき頃の
懐かしくもある
そして
淋しくもある
出来事・・・

心豊かで
希望があり
大好きな君の
瞳を見てるだけで

少年の頃の
憧れに似た恋を
心の中で
探してる・・・

そうなんだ
またあの頃に
帰ろうって

だから・・・
愛しきあの日には
夢の中で
君と二人で歩いている

12月は

— 12月は—

1年最後の月
残りものの福に
あやかろうと

棚からぼた餅的
図々しい発想・・・

でも・・・
今までの運のなさを
この月で取り返して
やるんだ的で
いいんじゃないか

時の運なんて
なかなか来ないし
運気はせめて
一度は欲しいもの

僕はいつかは
幸運が訪れることを
信じているのです

美しいもの

—美しいもの—

良い景色・・・
夕焼けがとても綺麗
ほんと絶景だよ

そして
目で見ただけでなく
耳に心地良い声や音も
美しいのに
越したことがない

そして心にも
感動や喜びや
何かしら楽しい
ものを伝えなくては

心にとっても
美しいものを
欲しがっているんだ

何事にも
夢があり
希望があり
楽しみがあり

五感全部が
美しいもの
になるといいね

雑踏

— 雑踏 —

Xmas近い雑踏のなか
行き交う人たちは
何故か
みんな楽しそう

道の向こうの
ビルには
Xmasツリーの
イルミネーションが映えて

今日は良い一日でしたって
語りかけてくるような
そんな気がして・・・

歩いていると
楽しくなってくるんだ

昔は大好きな人と
手をつないで
歩いたんだって
急に思い出したりして

綿帽子をかぶっても
不思議でない寒い冬模様に
君の温もりが
恋しくなるのです

プロポーズ

ープロポーズー

僕からのプロポーズ
ありきたりだったんだ

いつまでも
僕のそばにいて下さい

どちらが先に
告白したかって
関係のないことだけど
やはりね・・・
男からってなるよね

二人がこんなに
幸せなんだから
どちらから告白しても
いいよね・・・

君からも一度は
私も告白したいって
言ったよね

そしたらね
二人で告白しあったら
良いんじゃないかって

愛の旅立ちって
プロポーズからだよね

赤いマント

ー赤いマントー

綺麗なマントだね

どこで買ったの？

これね・・

おばあちゃんから貰ったの

杖をついた魔法使いのような

おばちゃんからなんだ

お嬢ちゃん寒くないのかい

ええ少し寒いけど我慢してるんだ

会う人がいてるからもう行くね

そしたらね

ちょっと待ってって言われて

何やらぷぷんのぷいぷい・・！

そしたら・・マントが出てきたんだ

お嬢ちゃん名前はなんて言うんだい

えりか・・って言うんだけど

えりかちゃんか

このマント着ていくといいよ

おばちゃんからのプレゼントだよ

明日はクリスマスだろう

マントを着て暖かくして行くといいよ

そうそう・・ブーツもあるといいね

もう少し待ってくれるかい

また呪文のような声が聞こえる

チキチキボンボン・・チンジャラホイ

すると今度は暖かそうな

赤いブーツが出てきたのです

えりかちゃん、このブーツも

履いていくといいよ

おばあちゃん・・・！！

何かサンタさんみたいになったよ

ほんとだね

えりかサンタだね

でもよく似合って可愛いよ

それじゃ・・・いってらっしゃい

おばあちゃんありがとう

えりかは

後ろを振り返りながら

おばあちゃんありがとうって

笑顔で手をふって出かけていきました

静かなクリスマス

— 静かなクリスマス —

街々の喧騒な
クリスマスのイメージじゃなく
僕のクリスマスは
静まり返ったような
静かな静かなクリスマス

朝は小鳥がやってきて
クリスマスを祝っている
道には雪が積もったように
車の音も聞こえない

こんな日の朝って
冷たくって寒いんだ
布団からなかなか抜けれない

夢の続きでも見てみたい
そんな気がするのだ

平日なんだから
少しはざわついていても
良いんだけどねって
そんなことを思っていると
すーっと
睡魔がやってきて
夢の中へ誘ってくれる

いつもとは違った
静かな僕のクリスマス
こんな日も良いんじゃないか

桃の花

—桃の花—

小さな一人の女の子が
今年の初めの桃の節句に
桃の花を髪に飾っている
お人形さんのようだ

わたしにもって
女の子たちが手を挙げるんです
薄紅色の蕾を付けた
桃の小枝を持ってきて
これでいいかなあ

それぞれ、それだよお
女の子たちが一斉に声をあげる

かんざしをすると
おしとやかで可愛くなるんだ
そして好きな人と
いっしょになれるんだって

そうなんだ・・・ひな祭りって
こんなに賑やかで
楽しいものなんだね

花のかんざしって
いずれは散ってしまっ
て何故か悲しくなるのだが

女の子たちは散れば散ったで
次は何の花にしようかなって
それはそれは愉快で
花のかんざしを
思いきり楽しんでいる

詩作

— 詩作 —

いつしか・・・
歳月に育てられ
日常的な思考系統が
侵されているような
そんな気配の中でも
辛うじて
詩に勤しんでいる

振りかえってみると
寒さの厳しい中で
詩を書いていると
早熟で下手な詩でも
どうにか見栄えのする
詩が出来上がる

小さい頃は
文学少年って声を
かけてもらいたくって
密かに作文なんかにも
気合いが入っていた

自分自身は詩人という
次元には到底
存在するわけではなく
ただただ
好きこそ物の上手なりの的な
考えと一人遊びに
過ぎないのである

でもされど詩人
ポエマー
さすがに良い作品って
ほめられると

嬉しいものなんだ

空・そら

—空・そら—

空・・

太陽、月、星

透き通る青

そら・・

飛行機、熱気球、飛行船

そして何故か紙飛行機

空って

入道雲、虹、飛び立つ鳥

そらって

青い空、夕焼け、風と雲

紺碧の空・・

君の瞳

澄みわたる心

心地よい浜風・・

希望の風を感じて

僕は恋を知った

なぜだろうか

風と愛と君と

いつも・・

君と一緒になんだね

ふるさとの香り

—ふるさとの香り—

ふるさとに着いた
この香りだ
この人たちだ

ふるさとを
守ってくれている
そしてそして・・・
笑顔がいっぱい

良い香り・・・
人の優しさ・・・
子等の笑顔と
若人の笑顔と
何故だろう
力が沸いてくる

みんな・・・
ふるさとの力なんだ
懐かしき風景も
変わらない

いつまでも
僕の心に
とどまっている
ふるさとの香り

歌ありて

－歌ありて－

いにしえからの童歌
会話はなくても
歌だけは歌おう

自作自演・・・
替え歌ありて
みんなが知ってる
懐かしき調べ

老若男女って・・・
いやいや
誰でも楽しい
替え歌遊びなんだ

歌ありて
孫ありて
子供たちありて

ふるさとでの
みんなの集い
楽しきかな
おかしなファミリー

神戸ポートタワー

ー神戸ポートタワーー

鼓が縦に・・・
細長くなってるような
ひときわ目を引く
デザインの塔

何だろうって
今まで思っていて
急に見たくなって

港街の神戸を
象徴してるような
少し歴史のある
タワーなんだ

えっ・・・
今まで行ったことが
なかったんだ

だから
大好きな女性と
連れだって
行ってこようと
そう思っている

年のはじめ

一年のはじめー

はじめ良ければ
終わりよし

良いことで生まれれば
終わりも
良いことで終わるんだ

最初に良いことがあると
気持ち良いものです

はじめが悪くても
それ以上は
悪くならないから

これもまた
あとは
良いことばかりって
そう思ってしまう

塞翁が馬・・・
そんな繰り返し
だから人生って
楽しいんだと思う

寒いから

—寒いから—

ひとり寝の
寒い日は・・・
冬って辛い？

このままずーと
起きていたい
でも・・・
眠りにつかないと

こんなときに
思い出すのです
昔の懐かしき
恋模様を？

そしてそして
清々しい
暖かい季節の
有り難きことを
教えてくれる冬

そうなんだ
寒って・・・
好きな人との
抱擁がよく似合う
そんな季節なんだ

気になること

－気になること－

気になることで眠れない
あきらめて布団に入れば
寝落ちするのに

ここだけは
読んでしまわないと
気になって・・・

明日にすればいいのに
やはり・・・
良いところは
早く結末を知りたいし

明日になんか
延ばせない
そんなワクワクの
出来事は・・・
そうですよね

気になることは
今日のうちに
決着しましょ

会いたい人

—会いたい人—

ピンポン・・・
門にあるチャイムが
可愛く鳴った

誰なんだろう
こんにちは

大好きな女性が
門扉のところに
立っているのです

やあ・・・ようこそ
いらっしやい
こんな遠くに

食事を一緒にとって
いけませんか？
食材を買ってるんだけど

こんなサプライズって
うれしい誤算です

安らぎの中に

—安らぎの中に—

何かしら
信じるところに
身を置くって
安らぎませんか

心のなかに
自然に入ってくる
音や言葉があり

それを抵抗なく
受け入れるって
心地よい
何かがある

明日への夢と
希望と・・・
考えられない何かが

自分自身の
力と勇気が
何故か
自然と湧いてくる

妄想のひとつき

－妄想のひとつき－

大好きな娘がやってきましたあ
お買い物してきたよ
昼ご飯作るわね
つうちゃん・・・ありがとう
いつも僕のために
いろいろ気配りしてくださって

荷物重くなかった
平気よこれぐらい
あとから！
好き好きしてくれたらいいんだけど
えっ良いのかい・・・僕なんかで
うん・・・Kさんって大好きなんだから

ほんとかい・・・つうちゃん？
冗談だろう
本気にしちゃっていいんかなあ
・・・つづく？

つぼみ達はいま

ーつぼみ達はいまー

春はまだですか？
もう待ちきれない

少しの・・・
暖かい陽射しで
早く開きたいって
ワクワクしてる
ほんと・・・
せっかちなんだから

ぼくんちの庭の
可憐なつぼみ達
・・・なのです

まだまだ駄目だよ
開いたりしたら

此処は特に
寒いんだから
風邪をひいちゃうぞ

ひとりぐらい
先に咲いても
良いんじゃないかなあ

だめだめ・・・
みんないっしょだよ
そのほうが
見栄え良くなって
綺麗なんだ

ひとりだけ
目立ってはいけないよ

みんなと同じでなきゃ

ぼくんちでは
つぼみ達はいま
春にむけて
忙しいんだよね

うそ

ーうそー

うそも方便
好きな良い言葉
許されるうそ
うそからでた
「まこと」・・・

問題解決に
うそをついてみた
何故か万事解決

ジョーク
見え見えのうそ？
エイプリルフール

きれいになったね
お世辞なんかは
上品なうそなんだね

ほんとうのような
うそって罪だよ
相手が信じちゃあ

うそって
良いこともあるんだ

そして・・・
いい加減なことも
うそなんだ

あの娘が好きと言ってたよ
信じて告白しちゃったら
うまくいったりして
そう・・・

うそに感謝してることも

うそって

コミュニケーション？

うそから話題沸騰・・・

いいうそをつこうっと

よろこび

ーよろこびー

お祝いの花火を
あげなくちゃ

そして夢の中でも
提灯行列が
続いているのです

バンザイ・・・
叫び声が今も
国中にこだますのです

僕も大きな声で
叫んでる

声が出なかったんじゃ
いえいえ
今日は特別なんですよ

こんな日は
今までの
苦勞を吹き飛ばさなくちゃ

さあさあ
みんなも大きな声で
万歳・・・バンザイ

春のプロローグ

ー春のプロローグー

つぼみ、蕾、ツボミ
椿に梅に桜たち
ほかにもいろんな花が

春が来ると
順番どおりに
咲くのかな

つぼみって
清らかで未熟で純情で？

僕にとっては
ふれるのを
躊躇してしまう

春って
やはり・・・
おそろおそろって
イメージで

少しずつ
着ぶくれした衣を
脱ぎすてていく
そんな感じなのです

初めてのk i s sも
いま思えば
そんな感じ
・・・だったのかな

大好きな人

—大好きな人—

大好きな人なのに
何も話しかけることもせず
ただ・・・黙っている

私の恋と同じ
好きとか
愛してるとか
何かを伝えなきゃ
いけないのに

でも心は・・・
通じているのです

そんな恋って
何処か可笑しいのに

でも・・・今は
まだ冬のなか

しかし・・・
夏のように
もっともっと
はじけちゃって
愛しあえばいいのに

あの頃は

—あの頃は—

あの頃を想うと
今もときめいてくる
そんな日もあったんだ

四季を通じて
いろんな面で
楽しかった日々

今も・・・君は！
お元気ですかって
聞きたくなる

抱きしめた
君の体を・・・
何故か今も
思い出してしまう
春を待つ日に

そしてそして
春がくれば
また・・・
会えるといいのに

approach

— approach —

アプローチ

接近・・・！

忍びよる恋

チョコレート色した

あの日がやってきた

この日を僕は

チョコレート色の日

と呼んでいる

ほろ苦い甘さ

何故か・・・

気持ちも負けそうな

誘惑の味がする

チョコレート・・・

僕にとっては

失恋の味かも知れない

ほろ苦い思い出が

この日にまた

よみがえってくる

小さい春

—小さい春—

庭の梅の木から
春の匂いが
ほんのりと
立ちこめようとしてる

そんな日は
春を想うような
陽射しなのだ

そして
千両の実が
紅色を
ますます強くし

来るべき春への
彩りを添える

まだまだ身にしみる
冷たさの中でも
積もった雪の中から
春が近づいている

星占い

ー星占いー

会うと

気まずくなる人の所

そこへは出向かない

新たな出会いから

生涯の友が現れる

長く続けてきたことに

吉兆がある

将来の布石になること

積極的に行動する

特技を生かせる仕事は

好調が続く

接近してくる異性には

本気にならない

愛する人には

もっともっと

素直な表現をする

贈りもの

—贈りもの—

おくりもの・・
すなおな気持ちで

好きだから
あ・げ・るってこと

この気持ちが
大切なんだ

もらってもらう人の
心もハッピーに

きっかけ作りの
おくりもの

好きな人
憧れの人が
自分だけのものに
なるかも知れない

好きな人のために
選んだおくりもの
心をこめた贈りもの

季節とともに

—季節とともに—

残り少ない冬を見て
寒さを実感して
雪にふれあい
氷を滑り

春を待ち
梅のつぼみが
膨らんだと
喜んでみたり

桜はまだかいなと
心待ちにして
野や山を歩くって
何故か楽しい
この頃なのである

鶯の声も
まもなくだよねって
会う人ごとに
話してみたり

ささいな日常のなかに
季節とともに
私たちは住んでいる

虚しきこと

—虚しきこと—

一人暮らしって
何故だか・・・
心も寂しくって
虚しいものだが

そんな虚しさを
紛らす・・・
いろんなことがある

そうなのです
好きなことしたり
趣味に没頭したり
ラジオを聞きながら
相づちをうったり

自然と・・・
独り言も
言ってみたり
妄想してみたり

独りでないと
その気持ちも
分からない
いろんなこと
・・・がある

生まれてきたのは
一人だから
苦じゃないはずなのに

最近は・・・
やっぱり
むなしくって寂しいと

思っている

実家なり

ー実家なりー

麗しきかな
ふるさとの香りがする

ふるさとの
景色に喜び

空気も
ふるさとらしくって

麗しき女性も
ふるさとで
出会ったんだ

ただいま実家なり
あー
我がふるさと

実家があるって
いいなあ

3月の車窓

－ 3月の車窓－

運転する
車窓からの
過ぎゆく景色

山々の緑から
春模様が感じられる
心地よい
弥生の月

窓を
少し開けると
一気に
春を感じてしまう

ポジティブ思考

ーポジティブ思考ー

決まってしまうって
どうにもならぬなら
仕方ないこと

どうせなら
何でも前向きに
考えることにしょ

その方が楽しいし
生活も愉快になる

高額納税者に
なってしまったよ

そして鼻高々に
僕の方が・・・
税金を多く
払ってるんだからね

優越感を
ありがとうって
少しは気が楽になったよ

3月の雨

－ 3月の雨－

雨音・・・

春のささやきに似てる

でも

濡れると冬の名残がする

春は目前なのに

まだまだ寒い

こんなときに

浮かぶポエムって

何故だか悲しくって

寂しいんだ

雨にぬれた

少女であったり

黄昏時の人恋しい

気持ちであったり

別れの香りが

いっぱい3月

そして今日は

雨の日の3月なのだ

時をこえて

一時をこえてー

甘いものって
時をこえても
愛される

今も昔も
みんな大好き

でもいにしへの
甘いものって
時をこえた今も
興味がある

特に大好きな
ようかんは
いにしえへの
想いを伝えてくれる

水車の音

－水車の音－

水の流れを受けて

水車はまわる

カタカタ

カタカタ

水の力はすごいぞ

電気も作るんだ

自然の力って

すごいぞ・・・

すごいんだ

村の水車

ここでは

いろいろな

仕事をしてくれる

そして

水車の音は

心まで豊かにする

年度末に考える

—年度末に考える—

考えるって
そんな大胆な
気楽に気楽に！

年度末って？
なあーに

卒業式・・・？
別れのとき？
異動の辞令が
1年のしめっくくり
新年度への希望

1年の集大成
目標達成？
充実感いっぱい
予算達成

今回もダメかあ
予算未達・・・？
今頃は・・・
頻繁に道路工事が！
迂回道路の増加

駆け込み需要
1万円が1万300円に？
3%たかが3%
されど3%・・・！
300円のために
まとめ買い？

福祉関係の増税なんだから
慌てず騒がずで・・・

いいんじゃない
払おうじゃないのって
太っ腹の気分なんだ？

僕って
まとめ買いなんか
台所が厳しいんだから
そんな余裕はないよ

1万って大金
日用品って
買いだめしなくても
僕は省エネ派なんだから

人混みに消えて

一人混みに消えて

何度も呼んだのに
返事が返ってこない
聞こえていないのか

人混みが・・・
邪魔をしてるんだ
そして人混みの中に
消えてしまった

涙をいっぱい
流したはずなのに
まだまだ
流し足りないと言う

もうこれ以上は
悲しみたくないのに

嬉し涙は
たくさん欲しい
幸せなことは
何度あってもいい

でも・・・
幸せすぎるって
かえって
悲しい出来事も
たくさんあると言う

だから
僕の大好きな人は
人混みに
消えてしまったのか

進路

— 進路 —

未来を決める

新しい出会い

進路って

自分自身が・・・

決めるだけじゃない

支えてくれた人々も

決めるんじゃないか

甘えたり

人に頼ったり

また

甘えられたり

頼られたり

知り合った仲間たち

新しく出会った人々

そしてそして

進むべき道を決める

良き人たちとの出会い

過去の出会い・・・

新たな出会いが

僕の進むべき道を

教えてくれたのです

観梅

— 観梅 —

梅の香りに
包まれて歩いて
幸せなこと

桜もいいが
春の最初の
花見って
やはり・・・
梅なんだ

春のはじめ
こうして
出かけると
春風が・・・
いらっしやいと
迎えてくれる

今年の春は
大好きな女性と
梅の観賞に
行くのです

ゆとりの時間

－ゆとりの時間－

少しの暇でも出来れば
余裕の時間が出来れば
・ ・ 何をしようか

庭の木々の手入れもいい
好きな人への電話もいい
家庭菜園？
ますますいいんじゃない

今はインターネット
ブログをみたり・ ・
ネットショップを覗いたり

近くの公園に出かけ
ブランコもいい
白いブランコなら
ズバリその歌を口ずさんだり

近くにある野山を歩いたり
春の息吹と小鳥のさえずり
小鳥と一緒にあって
散歩をするのもいい

僕は何をしようか
そうそう・ ・
やはり詩を書こうっと
ゆとりの時間・ ・
あなたは何をしますか

工事の音

ー工事の音ー

ウーン、ウーン
ダッタッタ、ダッタッタ
チャチャチャ・・・

騒々しいはずなのに
リズムカルな音は
工事のオーケストラだ
なかなか良い響き

ガッガガ、ガッガガ
キーン、キーン・・・
なんだなんだ
この音は・・・

少し無理な音のようだ
でも作業してる人は
必死なんだろう
苦闘してる様子が
浮かんでくる

また良いリズム音に
なったのです
ウーン、ウーン
ダッタッタ、ダッタッタ

工事の音って
未来にむかって
精一杯進んでるようで
楽しくなってくる

光と土と水と

－光と土と水と－

日当たり、土、水？
えっなんだって
ああ・・・菜園なんだ
才媛じゃないよ

僕はこちらの方が
大好きな感じです

そして・・・良妻賢母
才媛で可愛くって
利口ぶらない
うーん
なかなか良い

種が良ければ
土もいい
陽光を浴びて
どんどん育ちます
何故か意味不明

要は・・・
何事も三位一体って
良いことなのです

今を考える

—今を考える—

夢ふくらみ
心かがやいた
遥かむかし

今も・・・
そうありたいと

若い魅力って
老いた魅力って
なんだあって

自分を・・・
磨きたくって

何か役立つものって
創る・・・
楽しさじゃないか

そして遊ぶ
心のゆとり・・・
今がそのときなんだ
そう考えているのです

気分良く

－気分良く－

出だし良ければ
吉日なりって？

かえってその後の
反動が怖くって
不安な気持ち

決しておごらず
舞い上がらず
常に平常心で
謙虚で・・・

気分が良いと
気前も良くなって
江戸っ子だってね
寿司食いねえ？

石松さんじゃ
ありませんが
そんなこんなで
気分良く

落ちれば落ちたで
頑張ればいいんだし
喜怒哀楽って
落差のあるのも
世の常なんだ

でもでも
気分の良いてって
良いことなのです

陽が昇る

—陽が昇る—

ワタシが
生きている限り
陽は昇ってくれてると
思っている

そう思えば
何故か楽しく

もし
生きていなければ
陽が昇ることを
この眼で
見れないんだから

あながち
間違いでもない
勝手に思ってる

朝は陽とともに
一日が始まり
陽が暮れてからは
何故か淋しく

部屋の明かりも
愛おしく、切ない
気持ちになるのです

夕食は何にしようかって
思ったとたんに
現実にかえるのです

そして・・・
明日になれば

また陽が昇るのだ

今も夢見し

—今も夢見し—

ひとり胸熱く
春の花ひらく地に

陽光がかげった
うすら寒いひととき

君との
思い出の出来事に
ひたっていた

時が移ろい・・・
君の心も
変わってしまうのに

でも・・・
ふっと静まり返った
名も知らない古風な処は
何も変わらず

いつもと同じ
野原いっぱい
花が咲いている

ネクタイ

ーネクタイー

ネクタイって
首を締めるよね

何故って
それはね
開放的でなくなって
しまうんだ

不満を漏らさず
嫌なことを外に出さず
人に嫌われないために
自分自身を謙虚に
振る舞うためなんだ

ネクタイをするって
そう言うことなんだ

我慢の始まりなんだ
今から戦うことなんだ

いざ・・いざ
かかって参れってね

はちまきも
同じような感じかな
いろいろと締めるって
凜々しいよね

旅心

—旅心—

春の陽射しがかげる頃
時は移ろい・・・
人の心も変わってしまう
そんな世の中なのに

聞いたところ・・・
此処は昔日の懐かしい
たたずまいを残していて
この静けさを
目の当たりにすると
何かしら妙に導かれて
足が向いてしまうと言う

でもまだ行ったことがない
一度は訪ねてみよう
と思っているのに
未だに果たしていないのだ

だからなのか
余計に訪ねなければと
いつも思っている

ほんと・・・旅心って
大切にしなくちゃ
いざ・・・牡丹の長谷寺へ

前に進め

ー前に進めー

前にしか
進まないもの？
後ろをふり返っても
何も返ってこない

自転車って手軽で
前にしか進まない

そうだ・・・
自転車に乗って行こう
そうそう
前にしか進まないものは
自転車だけじゃないだろうに

気持ちって
何故だか・・・
後ろにも向くよね

でも・・・
後ろなんて
見なきゃいいのに

前しか
向かないようにしなきゃ
後ろよりはたくさんの
良いことがあるんだから
前に進もう・・・

恋人がほしい

— 恋人がほしい —

彼女はいつも
恋人がほしいって言った
ルームシェアの友達のような
少し距離のある恋人

結婚はしなくっても
お互いに自由でいたいから
やりたいことも
たくさんあるしって

あと何年かしたら
恋人がほしいって
言わなくなった

そうなんだ
何故だか結婚してるんだ

誰だって良いってことは
ないのだけれど
結婚してしまった

結婚する人は
好きな人が一番かなって
言っていたのに

大好きじゃないって
言っていたのにね
相手に好かれて
一緒になったって

元々は他人なんだから
少しは妥協しないとね

変な女の子

—変な女の子—

自分を言うのに
私じゃなく名前を言う子

それは私がするじゃなく
それは美絵がするって
自分の名前を言うって
これって変じゃない？
時々いるんだこんな子が

食事に誘っておいて
自分では払わない子
誘っておいて
何なんだこの子って
普通は・・・
誘った方が払うだろう？

でも・・・
何故だか憎めない
得な性分なんだ
何もかもが
可愛っていいよなあ

ほんと・・・
あやかりたいよ

いやいやそうじゃない
自分らしさを
出してるだけなんだ

化粧しなくっても
綺麗なのに
厚いメイクをしてみたり
ほんとうに変な子なんだ

そうかと思えば
すっぴん女子で
化粧って・・・
仮面を付けてるみたいで
嫌いなんだと言ってみたり

でも人と同じ事するって
嫌なんだって
そんな子が・・・魅力的かも

いつか来た道

—いつか来た道—

夢にまで見た
いつか来た道
今もあるのだろうか

確かあの日は
君と歩いたところ
細い細い
・ ・ 山の小道

あの日も
この日と同じ
森の中から
春の音が ・ ・
聞こえてくる

そして
一番記憶にあるのは
初めて君を
抱きしめたところ

いつか来た道
今度はひとりで
訪ねてみたいと
思っているのです

二度の恋

—二度の恋—

二度の恋・・・

若くって可愛い君には
大好きだよって言葉しか
言えないのだ

許してくれないか

この言葉で・・・

最大の

僕からの君への

プロポーズの言葉なんだ

緑の風の頃

－ 緑の風の頃 －

緑の風が吹く頃に
鳥がさえずり
風もささやき
陽はさんさん・・・

木々はそよぎ
日陰も緑色に
明るい緑に
ダークな緑・・・

緑のコントラストに
からだを預けて
ひと眠りしたい

そんな気持ちになる
昼下がりに・・・
僕は君との明日に
思いを馳せている

梅雨の香り

－梅雨の香り－

曇り空って
梅雨の匂いがする

薫風に吹かれると
かすかに昔日の匂いを
感じるのである

あの日あの時の・・・
愛しき君の香りなのだ

だから梅雨が近づくと
切なくて・・・
何故か虚ろな気分なのに
少し嬉しくなるのです

変なの

－変なの－

朝起きて
好きな女性の
顔を見て

いつも綺麗だねって
しっかり
お世辞も伝えて

相思相愛に
早くなりたいてって
心で思ったり

勝手に
いろいろと
思い巡らすのも
良いのではないかと

初夏が近くなると
昔のことを思うのです

食いしん坊

－食いしん坊－

僕のまわりは
よく食べる仲間
いっぱいだった
美味しいもののためならって
何をおいても駆けつける

特に歓送迎会や忘年会
食べ放題じゃないと
許してくれない

そして食事は
井鉢に二杯は当たり前
なにせ豪快だ・・・
そして何故か太っていない
皆んな痩せている

俗に言う
痩せの大食いなんだ
僕もよく食べるのだが
彼らと食事すると
圧倒されてしまう

今は少食で上品になった
けれど・・・
食卓の品数を見ると
少し淋しい気持ちだけ
昔が懐かしくなってくる

まあまあ・・・
食べてるときが
一番の幸せって
ほんとに良いものですよ

顔と心と

ー顔と心とー

怒った顔

憎しみめいた顔

怖い顔

最近・・・思うのですが

心までそうなって

しまうんじゃないかと

笑みを忘れてしまって

笑みのない顔してると

心まで淋しくなってしまう

歳を重ねるごとに

性格まで

丸くなってしまって

喜びに満ちた顔

楽しそうな顔

嬉しそうな顔

どっちだって

良いんだけれど

そうなんだ

これって幸せ顔なんだ

心まで・・・

ハッピーにしてくれる

これから

同じ生きるのなら

毎日を笑顔で・・・

如何でしょうか

腹が立ったとき

笑顔で怒ってみよう
顔がひきつらないように
しなきゃあ・・・ね

右向け右

ー 右向け右 ー

右向け右

前向けー

気をつけー

礼つ・・・

学校での

全校朝礼

前から並んで2番目

そうなのです

背の低い順に

並ぶのです

背の高い順だと

前が見えないんだ

校長先生が壇上に

あがって

おはようって

昔の思い出が

浮かんできます

美しい朝

－美しい朝－

梅雨空・・・

梅雨入りになったのか

少し暑い気温に・・・

そんななかで

窓を開けて

ベランダに出ると

爽やかな風が吹き

薄着姿では

1枚羽織りたくなるぐらいだ

心地よい朝の空気

緑の山々が見え

駅から出発したであろう

コトンコトンと

電車の走る音が聞こえてくる

そして建物の隙間から

車両の後部が見える

背なの方からは

ぼうーぼうーぼうっと

汽笛の音が聞こえ

のどかな港の風景が

記憶の中から

現れてくる

ああー美しい朝

ふるさとの朝なのだ

そして僕は

美しい朝を迎えるのです

好きな言葉

—好きな言葉—

しなやかで・・・
したたかな行動
機敏な動作

勉強は
好きじゃないのに
何故か・・・
体を動かすのが
大好きなんだ

人生は長いから
ゆっくりあせらず

大人になってから
学校に行くって
だめなんだろうか

飛び級って・・・
好きな言葉なんだけど
早く進んでも
まだまだ
先は長いんだものね

子等の歓声

— 子等の歓声 —

窓を開けた

子等の歓声が響き・・・

子等の笑い声がこだまする

模型の電車に乗って

何度も行き交っている

楽しいって

子等はもちろん

大人も充分楽しいんだ

窓を閉めると

何事もなかったように

静けさが戻ってくる

外から見える光景・・・

のどかな中の賑わい

ふっと目が覚めた

日曜日の朝・・・

ワクワクドキドキ

ーワクワクドキドキー

始まる前から

ドキドキ・・・

予選突破かな

ワクワク・・・

もうもう

じっと見ておれないよ

怖くって

でも

怖いもの見たさか

いやいや

世紀の一戦なんだからね

すみからすみまで

見なきゃ

ワクワク

ドキドキ

勝てば心臓が

どうなるのかなあ

小さな幸せ

—小さな幸せ—

子等の
楽しそうな笑顔を
いつも見ると
こちらまで
楽しくなってくる

だから・・・
公園やら
遊園地って
好きなんだ

僕も童心に帰って
楽しいんだ

ボール遊び・・・
仲間に入れてよ
いいよっ・・・
それじゃいくよ

よっしゃ
今のキック
なかなかいいやんか

ついつい
日が暮れるのを
忘れてしまう

小さい幸せが
だんだんと
大きな大きな
幸せになるんだよ

大きな幸せって

小さな幸せの
積み重ねだからね

小さな喜びに
感謝して
大切にしまきゃ

6月の恋

－ 6月の恋－

6月ってアユ解禁
アイ解禁？
愛解禁なんだって
いそいそ、そわそわ

わたしが作ったブラウス
世界でたったひとつ
今日はこれを着て行くわ

そうかそうか
僕は君と・・・
初めて会った時の
服を着て出掛けるよ

そして
おはよう
今日はと
声で手をつなぐのです

好きだよって
呟くだけで
何故だか君が
頷いているのです

ほんとうなんだね
心がつながってるって
やはり6月なんだね

よっちゃん

ーよっちゃんー

よっちゃんて？

よい子のよっちゃん

良子っていうんだ

良い名前だね

でもね・・・

はじめから良い子って

ずるいんじゃない

ずるいもなにも

よい子のよっちゃんて

羨ましすぎる

僕は・・・

次に生まれたら

良夫って

名前にしようかな

よっちゃんて

ほんとに

いい名前だよな

忘れられない言葉

－忘れられない言葉－

忘れていないよ・・・
一度聞いたら絶対に
でもその聞いた言葉は
遠い過去になってしまっ

忘れちゃいやよって・・・
言った君は先に逝ってしまった
返事は僕があこの世へ逝くときに
忘れないように必ず
持って行くことにします

なつかしい遠い日々は
いつの間にか過ぎてしまっ
ふっと何だったっけと
考えてしまうことがある

そうなのです
それは・・・誓いの言葉
いつまでも愛してます・・・
今も決して忘れていないよ

でもでもなのですが
もうこんな歳になると
僕から君に伝えるのが
恥ずかしくって
今からドキドキしてるんだ

心の旅

—心の旅—

僕の心の旅は

夢の中・・・

そして

大好きな女性（ひと）と

メルヘンの旅も

二人そろって

同じ夢なんて

最高のプレゼント

君と僕のおしゃべりの旅

生きてるうちだからねって

そりゃそうだけど

それよりは

二人の星座を訪ねてみようか？

そうそう

恋するときは

心にノックしてよね

ごめんごめん

忘れていたよ

でもでも

サプライズって

嬉しいでしょ

結婚って

ー結婚ってー

ふたりでワインが飲める
好きな音楽が聞ける
ゆったりまったり
そして愛しあって
落ちついた家庭がいいなあ

積極的で
互いに明るいふたり

はじめは良いともだち？
結婚へは何故か
まさかの・・・
夢に見たことなんだ

正夢って
少し恥ずかしくって
でもとうとう
結ばれたんだ

照れくさいから
夢の中で・・・
プロポーズするよ
と言ったら

夢の中で・・・
返事するからって？
また同じ夢を
見るのだろうか
思っているのです

そしてふたりで
夕陽を見てる・・・

ふるさとの夕日

ーふるさとの夕日ー

夕日が沈むときに
ギンギンギラギラって歌った
そんな子供時代へ
帰ってきたよ

またまた
戻ることが出来るんだよ

いつなのかは誰かがね
教えてくれるんだって

おとなしくして
待つと良いよって
本当かどうかは知らないけど

それが突然に今日だったんだ
そして夕日を見てきたよ

海を越えて

—海を越えて—

青い海原

かもめと白い雲

ざあざあー

ざあざあー

波の音とひゅーひゅー

風のがする

船は時間がかかるのに

乗ってみると速いぞ

波を蹴って

風をきって

波が太陽に照らされて

ぎんぎらぎんぎら

船室の天井に

光が海面に反射して

賑やかになっている

さながら波と光の

・ ・ 大運動会だ

キラキラ ・ ・ キラキラ

ほんと ・ ・

眼に眩しい輝きなのだ

空へ

—空へ—

ほうきに乗って

空を飛ぶ・・・

ますます夢が広がって

いろんな国を飛びまわる

いいなあ、いいなあ

子どもだけじゃなく

大人も楽しい

夢の中でしか

実現しないかもなのだ

でもこんな夢は

何度見ても楽しいはず

枕の下に

願い事を書いて

眠るとするかな

夏は君と二人で

—夏は君と二人で—

浴衣の君は
ほんと・・・
可愛いよね
僕まで嬉しくなってくる

荷物持ってあげようか
ありがとう
今日は優しいのね
いつもだけど

君の歩幅に合わせて
ゆっくりまったり
そして手をつないで
歩くって
何故か新鮮なんだ

次は僕も・・・
浴衣を着てくるね
暑い季節だけど
夏っていいなあ

ひまわり畑にて

—ひまわり畑にて—

暑いのにね
いっぱい花が咲いて
みんなで
笑顔で出迎えてくれて
ほんと・・・ありがとう

感激して嬉しくって
きれいだよって言ったら
一斉にこちらを向いてくれて
はいポーズって

黄色い黄色いひまわりは
幸せを運んでくれるんだよね
来年もまた・・・
会いに来るからねって

そしたら
ひまわりたちが
首をふるんだよ

僕はウインカーで
合図を送って
ぶるんぶるんと
エンジンをふかして
さよならしたのです

E p i l o g u e

詩集：いま会いにゆきます・・・既に亡くなっているのに何故だかまた会えるのじゃないかそんなことを思っていたり、考えたりしていると不思議に詩が目の前に浮かんでくる。

詩集のタイトルとは上手くリンクした詩であれば気持ちがいいのであるが、そうはうまくはいかないものであって、作者自身が一番歯がゆい思いをしているのである。

だから詩集のタイトルと違った拙い詩でもめげずに詩を書いているのである。

そして詩を書けたという一種の充実感だけは心のどこかに残っていて安心するのである。一番嬉しいことは読者の方々が詩のひとつに遭遇して、これはと言うようなお気に入りの詩が一つでもあればと念じています。

最後に詩集発表の場を提供下さったP u b o o様、いろいろとお世話になった知人、友人や諸先輩の方々に感謝を申し上げる。

恋人と共に春を待ちたいと思う冬にありて

2019年1月 飛鳥 圭

詩集 いま会いにゆきます

<http://p.booklog.jp/book/123039>

著者：飛鳥圭

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanbika21/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123039>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト